
新訳 魔剣伝～アリシア～

六星かのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新訳 魔剣伝〜アリシア〜

【Nコード】

N8627E

【作者名】

六星かのり

【あらすじ】

【あらすじ】三人の神が造った異世界「アゼル」。その悠久の歴史の中で、最強と謳われた魔剣アリシアの物語。とある研究施設を舞台にした、箱庭系ファンタジー小説です。彼女の身に、様々な出来事が降りかかる！！

【序の章】（前書き）

【注意】この作品は、同著者作「魔剣伝くアリシア」を構成しなおした『新訳』の作品です。内容は97%同じなので、ご了承下さい。

【序の章】

『魔』の力を持つ者達の住まう世界、『アゼル』。

それは、三人の神が「無」の中に創り出した混沌の異界である。

兄神アグニは、世界の素となる『ピース』を作り上げた。そして弟神ドルマがピースを組み合わせ、世界の『基盤』を作る。最後に妹の女神アリーシアが、残ったピースを使って『生命』を作ったのだ。

それが異界『アゼル』誕生の瞬間だった。

それから暫くの間、三神は世界を見守り続けたのである。

だが、悠久の時の果てに、自我を持ち、知恵を持ち、文化を持ち、やがてその手に武器を持つ愚かな種族が現れた。

それは「人間」と呼ばれる一族である。

人間たちは、私利私欲の為に秩序を放棄し、『戦』を繰り返す日々を送っていた。

その永い時の中で、人々は神の存在を忘れ信仰をも失っていく。

兄神アグニには、その愚かで野蛮な人間が許せなかったのだ。

兄神は怒りのあまりに、世界を形成する『ピース』の全てを無に還そうとした。だが弟神ドルマと、女神アリーシアがそれを強く拒む。

二人にとっても、人間は愚かしい存在である事は紛れも無い事実。しかしその存在は、広大な世界アゼルの小さな点でしかない事もまた事実だった。

その小さな点の為に、世界アゼルそのものを無に還そうとする兄神の考えを、二人には理解できなかったのである。

人間の『ピース』だけを無に還せばいいと、弟神ドルマは言う。しかし、女神アリーシアはその意見にも反対した。自分が作った

命を、そう簡単に消されたくは無かったからだ。

女神は、人間に対し最後のチャンスを与えたかった。それでも『戦』が減らない時は、ドルマ意見を実行しても仕方ないと思うのだ。

三神は長い時間をかけて話し合い、3つの意見を1つにまとめる。その結果として、愚かしい人間に『クライム罪の規則』を与えた。

まず手始めに、女神アリーシアが『ソウル・ペブルピース』から作った『ソウル・ペブル魂石』を、人間の体内に埋め込んだ。そして、人間が犯した『罪』を、『ソウル・ペブル魂石』に蓄積するようにしたのだった。

更に、戦の好きな人間の興味を惹く為、罪が溜まると戦闘能力が上昇するという利点を与える。

結果、人々の罪はすぐに溜まり、更なる力を得た人間の争いは激化の一途を辿った。

やがて、中身の能力だけではなく、その外見にも変化が現れ始めた。

より多くの罪を得た者達が、次々と人の姿から異形のモノへと進化したのだ。

それが、後に『魔』と呼ばれるモノだった。

体内の『ソウル・ペブル魂石』の形状や、そこに蓄積される『罪』の種類、更に遺伝子等でその外見や能力が決まる。また、それらの情報が子孫へと遺伝する過程で分岐していき、様々な『魔』の種類が生まれていったのである。

やがて人間は、『魔』を分類する為に、勝手に名前を付け始めた。その中に、この物語にも登場する「魔剣」や「魔銃」という物質的な物を由来とする呼び名や、「魔鬼」や「魔に堕ちた天使」等の想像上のモノが由来の呼び名があるのだ。

姿が『魔』へと変化する事で、更なる力が発揮できる事を悟った人間は、戦いを求め、罪を求め、アゼル全土が真紅に染まっていた。

しかし、この最低最悪とも思える状況でも、全ては三神の考えた

思惑通りに進んでいたのである。

三神は人間を喜ばせる為に『罪の規則』クライムルールを作った訳ではもちろんない。

『罪』を重ねる先に得るものは、利点だけでは無いのだ。

当たり前の事なのだが、『魂石』ソウル・ペブルは有形物であり、限度もある。故に、『罪』を無限に蓄積できる訳ではない。そして、その限度を超えた先ある本当の罰、それが弟神ドルマが望む、人間のピースを無に還すという事なのだ。

人間が死を迎えると、体を形成していたピースが長い時間を掛けて分解され、やがて神の元に還る。そして女神によってピースを組み替えられ、新しい生命として再生されるのだ。

しかし、人間は生まれ変わっても人間。それが、アゼル誕生時に作られた『循環の規則』サキュレシヨナルである。

その規則を踏まえ『無に還る』というのは、循環過程から除外され、『ピース』そのものが消滅してしまうという事である。人間を作る『ピース』が全て無くなれば、それは弟神ドルマが望む『人類滅亡』を意味するのだ。

やがて、『無』を恐れ始める人間たち。

いくら罪を得て、強力な力を得たところで、存在が消えてしまえば意味が無いのである。

やがて無益な争いを減らし、秩序を取り戻すが、それでも、『戦』や『罪』が全て無くなる訳ではない。

もちろんそれを回避する術を、神々は用意してあった。それが神への「祈り」や「懺悔」なのである。

人間は神々を奉り、崇め、祈りや懺悔で『戦』と『罪』の均衡を保ったのであった。

三神の作り上げた『罪の規則』クライムルールは、人間が忘れていた信仰心を取

り戻し、神々の存在を知らしめる結果となった訳だ。

やがて、更に時は流れ、人間たちの中に『二つの思想』が発起した。

一つは、神より授かりし『ピース』を無に還す事を恐れ、『戦』を捨てて平和を求める思想。普通の暮らしの中で得てしまった『罪』を、祈りや懺悔によって神の元に還すことが最高の幸せと考える『ドルマ教』。

もう一つは、神々が創った『クライム罪の規則ルール』に身を任せ、無に還る事が神への最高の信仰だと考える思想。『戦』を好み、その中で得た『罪』こそが、彼らにとっては名誉なのだ。誇りとプライドを重んじ、『戦』以外で他人の命を奪うようなマネは決してしない。名誉の罪を得て、無に還った先に新天地があると信じる、それが『アグニ教』である。

しかし、『ドルマ教』にしても『アグニ教』にしても、人間が勝手に考え、作り上げた、ただの理想である。

弟神ドルマは人類滅亡を望み、兄神アグニは世界の全てを無に還そうとしていた。そんな事など知らずに、自分達が掲げる理想に二人の名前を付けたのだ。

その事実が、人間が何処までも愚かな存在なのだという事を物語っている。

こうして人類は、アグニ派をドルマ派に二分された。

それぞれが独自の文化を持ち、生活様式を持って、その二つが交わる事は無い。

お互いを肯定する事も否定する事も無いまま、数千年の時が流れ、今でもそれは不変であった。

神々の本当の意思を知らぬまま、人間は愚かに生きている。

ようこそ、醜い『魔』の力を持つ者達の住まう世界、『アゼル』へ……。

血の臭いがする…。

1

ここは、何かの研究施設のような一室。

見慣れぬ機械達は皆ズタズタに破壊され、小うるさく警告音を掻き鳴らしている。

元はファイルにまとめられていた筈の書類が、今はただの紙切れとなり床に飛散していた。

それはまるで、大きな嵐が通り過ぎた様な酷い有様だ。

部屋の至る所に、命を奪われた者達が倒れているのが確認できた。ある者は壊れた機械にもたれかかり、ある者は床の紙切れの上に倒れこんだまま、皆ピクリとも動くことは無い。

部屋を囲む壁は、元は白一色だったのだろう。しかし今では、無残にも血痕が激しく飛び散っていた。

例えるなら、純白のキャンパスの上を、紅色をたっぷり含ませた筆先を縦横無尽に走らせた様な感じだ。

部屋の中央部分には、二基の機械が並んでいた。

床に土台となる機械が設置され、その上に筒状のガラス、その更に上を機械で蓋をしているといった形状だった。土台と蓋の機械部分から、三本のホースがそれぞれ床と天井へ連結されている。

大人一人ぐらい軽く入れそうな大きさで、二基の内一基はガラスが割れ、中に入っていたと思われる無色の液体が床に流れ出していた。その液体は、床に横たわる白衣の男の所まで流れ出し、血の紅がまだら模様を描いている。

彼はこの施設の研究員だったのだろう。

左肩に刺繍の入った記章が縫い付けられていた。

三人の人物が跪いて台を持ち、天を仰ぐ人物がその上に立っているといった感じの刺繍だ。それが、何を意味しているのかは分からない。

白衣を着た亡骸達は、致命傷と思われる傷の位置は様々だった。

だが、鋭利な凶器で切り裂かれているという点は、皆共通していた。誰もが目を覆いたくなる様な、非情で残酷な光景。それは、この場所では何らかの事件が起きたという事実をまざまざと物語っている。

その中において、たった一人だけ他者とは異なる雰囲気醸し出す人物がいた。

長い黒髪と、程よく引き締まった体の曲線。うつぶせの状態で横たわるその者は、一糸纏わぬ女性の姿だった。

彼女の背中には、深い切り傷が肩口まで伸びている。

何故全裸なのかは疑問だが、この事件における一被害者である事は間違いない。

他の亡骸と比べ、性別や服装だけではなく、もう一つ大きな相違点があった。微かに呼吸をし、まだ生きているのだ。

やがて、彼女の体で不可思議極まりない現象が起きた。背中の傷が、みるみる塞がり始めたのである。その回復速度は人間の能力を遥かに凌駕し、驚異的な治癒力だ。

あっという間に、深い傷があった事など分らない程に復元されていた。

先程までは微弱だった息遣いも、徐々に通常の呼吸へと移り始め、やがて目を覚ました。

始めは差し込む部屋の明かりに眩しさを覚え、完全に瞼を開ける事はできない様子だ。

目の周りの筋肉にありったけの力を送り、眉間や目尻に無数のシ

ワを寄せる。

そして、徐々に光にも慣れ、ゆっくりと綺麗なスカイブルーの瞳が姿を現した。

「!」

目を開けて直ぐ、目の前で倒れる男と不意に視線がぶつかり、彼女は驚きのあまり音にならない悲鳴を上げてしまう。

白衣を着たその男は、彼女と同じうつぶせの状態で倒れていた。大きく見開かれた両目で彼女を捉え、絶望と困惑と驚愕が入り混じった表情のまま固まっているのだ。

その光景を確認して、男はすでに死んでいるのだと彼女は直ぐに理解した。

男から視線を外し、軽く上体を起こしながら部屋中に視線を配った。

室内を一通り見渡し、

「ここは…何処?」

周りの風景に全く見覚えが無かった。

更に、この荒れた一室で何が起きたのかも全く分からない。

疑問を抱え、深く考え込む。

不意に視線を落とし、露になった二つの乳房が視界に入った。彼女は驚き、

「え?え?」

と、思わず二度見してしまった程だ。

自分が裸だという事実に気がつき、慌てて乳房を隠した。

しかし、今のこの状況で隠す必要等ないのだ。周りは亡骸ばかりで、見られる心配が無いのだから。

そう思ってみても、恥ずかしい気持ちは拭い去れない。

再び部屋中に視線を巡らせ、服を探した。

すると、先ほど視線が合った男が着ている白衣が目にとまった。

急いで男の下へ駆け寄り、白衣を脱がせに掛かったが、死後硬直しかけているせいで予想以上に手間が掛かった。

最後は剥ぎ取るように奪い、直ぐに腕を通してみる。

サイズは少し大きめだったものの、全身を隠す目的にはピッタリだった。ただ、左胸の切り裂かれた穴と血痕が少しだけ気になったが、今は贅沢を言っている場合ではない。

急いで上から下へとボタンを留め始め、最後の二つを残して手が止まった。

彼女の視線は、部屋の中央の二基の機械を見据えている。

一基はガラスが割れて見るも無残な有様だったが、もう一基の方には人影が映りこんでいたのだ。

その人影は白衣を着た女性で、こちらを疑視している様に見えた。当たり前だが、それは彼女自身の姿なのだ。

留めかけのボタンから手を離し、機械の方へと歩み寄る。そして、ガラスに写る自分の顔に左手をそっと当て、

「これが…私…なの？」

自分であるはずの顔を見てもしっくり来ない。まるで、他人の顔だと彼女は思った。

その後数秒見つめてみたが、結局それが自分だと認識できない。

不意に、彼女の中に疑問が生まれた。それは、

「私は…誰？」

この時になって、自分が記憶喪失なのだと気がついたのである。

不意に、心の中で不安と動揺が生まれた。

切れ長で二重の瞼、スカイブルーの瞳、さほど高くも無い鼻、小さな口の口、ガラスに映る自分の顔を見ても、それが本当に自分の顔だという確信がない。

どれだけ眺めようとも、部分部分を注意深く見ても、他人の顔に

しか思えないのだ。

部屋に響く警告音がやけに耳に付く。

不安と動揺がぐちゃぐちゃに混じり合って、頭も心も乱れていた。

＜一体どうなっているの？私は誰？ここは何処なの？＞

彼女は心の中で繰り返し問い始める。だが、答えなど見つかるはずは無い。

頭と心の不安と動揺が肥大して、やがては一つになり、そして最後には大きく弾けた。

ガッシャー――――！！

不意に、ガラスが割れて床に飛散する音が部屋中に響き渡った。

もちろん自然に割れた訳ではない。

彼女の突き出した拳が、ガラスを粉碎したのだ。

しかし彼女は、何が起きたのか全く分からないといった表情を浮かべ、床に散らばるガラスの破片と、自分の拳とを交互に見ていた。手の甲にできた傷口からは血が溢れ、床へぽたぽたと垂れている。だが、不思議なことに、痛みは全く感じられなかった。

何故か涙が溢れてきた。悲しくも痛くも無いのに、生暖かい感触が頬を伝い落ちていく。

＜もう、どうしたらいいの？私には何も分からない。何も分かったくなんかない：＞

そう思った途端、急にその場にしゃがみ込み両手で顔を覆った。

涙が溢れないように思い切り瞼を閉じる。

それでも頬を流れてしまう涙は、しっかりと両手で拭った。

そしてその時、彼女は気がついてしまう。先ほどまで血を滴らせていた右手の甲には、もはや傷など跡形も亡くなっている事に。

「もういやだぁ――！！！」

彼女は喉が潰れてしまう程に、大きく叫ぶ。

再び両手で顔を覆い、激しく泣きじゃくった。

部屋に響く警告音が、頭の中で繰り返し反響する。

「うるさい！うるさい！うるさい！！」

そう叫びつつ、両手でしっかりと耳を塞いだ。それでも尚、聞こえてくる耳障りな音の群れ。

もう、居ても立ってもいらなくなり、彼女の中で蓄積されてきた不満が一気に爆発した。

「もう！！いい加減にしてよ！！！！」

正にその時だった。

彼女の後方に設置された部屋の扉が、音もなくすーっと開いたのだ。だが、彼女は全く気づいてはいない。

不意に、部屋の中へと数人の人影が飛び込んで来た。

部屋に訪れた招かれざる客人達は、全部で六人。

皆、黒の防具で全身を包み、その手にはマシンガンタイプの銃を従えている。

六人の先頭に立つ人物、たぶんこの部隊の隊長であろうその兵士が、銃を持った右手を軽く挙げる。

他の五人が一斉に銃を構え、部屋の中央で泣き崩れる女へと照準を合わせた。

そして少しの間の置き、隊長が上げた右手を振り下ろす。

ズバババババババババババ！！！！

室内に響く発砲音。

彼女はその音で、見に迫る危険に気がついたが、時はすでに遅かった。無数の鉛玉が彼女の背中を襲い、そのまま床へ倒れ込んでしまった。

それでも尚、執拗なまでの発砲がその後も数秒続けられた。

もはや彼女の体は、蜂の巣状態のはずである。

部屋にはそれから数秒の間、警告音をも打ち消すほどの発砲音が響き渡った。

やがて部隊長と思われる人物が、再び軽く手を挙げる。同時に発砲音は止み、五人の兵士達は一斉に銃を降ろした。

彼女は床に倒れたまま、全く動く気配がない。白衣には無数の穴が開き、全体が彼女の血で真紅に染まっていた。

部隊長は、挙げた手をゆっくり下げた。

すると、五人の兵士は見事に統率された迅速な動きで、床に倒れた女へと歩を進める。

そして一人が軽くしゃがみ、指を女の喉元へ当てて脈を確認した。そして、女に脈がないのを悟り、部隊長の方に顔を向けコクリと一つ頷く。

だが、それを黙視していた部隊長は、ある事実に気がつき驚愕した。脈を確認した兵士の腹部から、鋭い刃物のような物体が突き出ていたのだ。

「!!!!」

声のない叫びをあげる部隊長。

非常事態を察した周りの兵士達四人が、再び銃口を女へと向けた。

刹那、阿鼻叫喚の悲鳴が室内に響いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8627e/>

新訳 魔剣伝～アリシア～

2010年10月9日02時45分発行